

# ゆう・あい

第 49 号

発行所：静岡県人権・地域改善推進会  
〒420-0865  
静岡市葵区東草深町二〇一七  
電話（〇五四）二六〇一五三四六  
発行人：天野 一  
行日：令和五年三月三日

## 朗読とピアノのコラボレーション

### シベリアのバイオリン



本会では人と人が心を通い合わせ、平和が実現していくことを願い、昨年3月に「シベリア抑留絵画展」、7月に「ハートフルコンサート2022」を開催した。「シベリアのバイオリン2022」はその一環として、今年度の人権週間（12月4日、日曜日から12月10日土曜日）に合わせ、12月3日、静岡市のサールナートホールで開催した。シベリアのバイオリンは、原

## 地域改善に関する要望活動

### 職員研修の徹底求める



作とピアノを担当した窪田由佳子さんの父、一郎さんの実体験である。敗戦後のシベリア抑留  
11月22日（火）、天野会長はじめ理事4人が静岡県令和5年度予算編成にあたり、要望活動

を行った。天野会長は「わが会は、平成10年に発足し、差別をなくすため、行政との協働による啓発活動をしている。人権問題・差別については、他県と比べ良い状況となっているが、現実には結婚問題、就職問題、地価差別が存在している。特に最近ではインターネットによる人権侵害が著しい」と川勝知事に説明。県及び市町の全職員に、公務員に求められる人権感覚を向上させるための人権・同和問題研修を徹底してほしいと訴えた。知事は、「地球市民として活

## 草地球博磐田市長を訪問

11月21日（月）、天野会長、古山副会長、本間副会長とともに磐田市を訪問し、草地球博市長と面談した。本会及びふれあい交流センターへの活動に対する磐田市の協力に謝辞を述べた。



草地球博市長は、「人権啓発はふれあい交流センターだけで担う課題ではなく、他の全ての交流センターでも取り組むべき活動である」と話したが、いまだ「寝た子を起さずな論」を標榜する議員や行政職員も多いようだ。引き続き同和問題について正しい知識や認識を求めていきたい。

## 人権ひなまつりコンサート開催

3月25日、サールナートホールで人権ひなまつり2023を開催した。

第1部は第6回ふじのくに HumanRights 脚本大賞最優秀賞作品「ためされている、みんな」を上演。部員が女子4人だけの高校演劇部を舞台にお話の登場人物と同年代の人たちがフレスコに演じた。新型コロナウイルス感染による仲間との信頼関係の揺らぎとその再生の物語。観客は新型コロナウイルス感染で自分たちが「ためされていた」ことを改めて感じる事ができたのではないだろうか。

## 人権WEBパトロール実践研修受講

10月29日、反差別人権研究所みえ（ヒューリアみえ）の松村元樹事務局長が講師となり人権パトロール実践型研修を受けた。現状我々が行っているWEBパト

ロールが大筋で手法的に間違っていないことが確認できた。松村事務局長からネット上の誹謗中傷や差別の書き込みに対しての削除要請の仕方、ソーシャルネットワークごとに教えてもらったのは大きな収穫だった。

また、11月には動画投稿サイト「ユーチューブ」に投稿された被差別部落の個人宅などの動画約200本を、運営するグーグルが、「ヘイトスピーチ指針に反する」として削除した。自治体などが削除を要請していたほか、被差別部落の出身者らが削除を求める署名を集めた成果だ。

しかし、インターネット上で被差別部落をさらす投稿は後を絶たず、過去の被差別地区名をさらした投稿も依然としてネット上に残ったまま。世界的な企業が削除に動いた影響は大きい。類似の投稿は多くある。今後、本会がWEBパトロールを行うにあたって、削除要請まで踏み込むかは今後の課題と思う。





多くの人が語る体験や思い (その2)

映画「私のはなし 部落のはなし」

静岡県人権・地域改善推進会副会長 古山 登章

同対審答申から半世紀余が経ち、法の整備等に伴い、同和地区の生活環境などは大きく改善されてきた反面、差別の意識は結婚問題を中心に今日なお大きな課題として残されている

差別はなぜなくならないのだろうか。一人一人がこの問題とどう対峙すべきなのか、この映画は「はなし」という形でこの問題を掘り下げ、考えようとしたものである

映画は、数名の当事者の青年と中老の女性が自らの体験を語り合う中で展開されていく。ストーリーはなく、したがって登場人物が語った内容について説明なども一切入らない。観客が登場する人物の語った内容をそのままに受け止めて、自分の中で消化していく。

三重県の被差別部落で育ったという中村さんは自らの恋愛体験を語る。高校時代つきあっていた女性の家族がある日突然よそよそしい態度をとるようになり交際は破綻した。同じような話は、ほかの男性からも語られる。三重県と同じ町に育った松村さんは結婚しようとした相手の家族から「今住んでいる所を

出て生活するなら素直に祝福できる」といわれた。一方で、差別する側の人間も登場する。結婚する前に相手の出自を調べたという人、最近大きな社会問題となつている「部落探訪」と称して各地の動画を撮つてネット上で公開している男性、彼はこの撮影を学術研究という憚らない。

先の松村さんは「この映画を通して部落問題のほんの一端に触れてほしい。へわたしたち」ではなく「へわたし」に触れてほしい。

被差別部落は、なぜ残ったのか。中世から現代に至るまでの共同体の歴史をたどりつつ、さまざまな立場の人びとが、自己と部落を語る。いくつもの世代の丁寧なインタビューや話し合いを追究することで多角的な視点と問題点を提示している。

静岡県人権・地域改善推進会事務局長 宮田 量子

そして、何よりも出演者たちは全て実名で登場する。人の辛い思いや悩みは、それが重ければ重いほど、その人の心の奥深くに沈み込んでいくものだろう。そうでないと人はその苦し

しい、部落ではなく「ある部落」の歴史や文化、成り立ちなどに触れてほしい、同じ時代にこんな問題が起きていることを知ってほしい」といつている。つまり、一般論ではなく一人一人の人生、生き方、生きてきた部落の歴史そのものを知ってほしいと言っている。これがこの映画からのメッセージではないかと思つた。そして、あまりにこの問題に関心な社会に対して「もつと関心を持つてよ」という声とも思つた。

ともあるだろう。それでも自分を曝しリスクを引き受け、メッセージを発信するのは、聴き手に考えてほしいからではないか。

たとえば私が差別の話をする時、ほとんど人が「自分自身は差別意識を持っていない」と言うし、「日本社会のごく一部が差別意識を持っているが、自分たちは違う」と自信を持っている

センター長の3年間を振り返って

静岡県人権啓発センター所長 根本 猛



残念ながらこの3年は「コロナの3年」でした。その間に私たちが学んだのは、多様な見方を尊重することの大切さだと思えます。

3年前の今ごろ思い出してみよう。もちろん新型コロナウイルスに感染することも嫌ですが、それ以上に新型コロナウィルスに感染したと周りに知られることを恐れる世の中ではなかったでしょうか？  
先日地元のスーパーマーケットで買い物をしてレジに並んで

る。しかし実はこうした層の無関心、無反応こそが日本社会の差別の温床になっている。

私たちは、普段の何げない行動が差別につながる場合があることを知る必要がある。知らないと確実に加害者となる。まず差別とは何か、自分の普段の行動で加害していないかを学ぶことが必要であり、それに必要なのは教育や学習機会のあり方

いたら、中年男性が「家族みんなコロナになっちゃって僕が買物に」と。レジの女性も嫌がることなく「大変ですね」とお見舞いを言っていました。コロナ感染は増えたり減ったりを繰り返すでしょうが、こうしてあつげらんと言えらるようになったのは不幸中の幸いだと思えます。

感染防止のための行動やマスク着用をめぐっては実に多様な考え方があります。そしてそれは、個人の健康状態やリスクへの捉え方に大きく左右されるので、一律にこうしようというのは無理で、できるだけ多様性を尊重することに尽きるのではないのでしょうか？  
最近は大手マスクも少し変化しつつあるようにみえますが、昨夏あたりまで大手マスク

改革だと思う。現在はそれらが明らかに足りていないため、加害していることにも気づけない。今回の映画のように興味の無い人にも当事者意識を持たせることが必要だと思う。部落差別を正しく理解する人が少なく、教えられる教員も少なくつなっている。差別の現実を加害者、被害者両方の立場から伝えていただきたい。

ミの多くは「大変だ！ みんなで我慢しよう」一色だったように感じます。同性婚やLGBTをめぐる議論から分かるように、リベラルって多様なものを見方を尊重するってことでしょうか？ なんでコロナではみんな我慢しようとしか言えないの!? あんたたちリベラルを名乗るのをやめたら(笑)と思つた2年余でした。

特に新型コロナウイルス感染で死んだり重症化することがほとんどない子どもや若者の利益です。もちろん基礎疾患がある高齢者の利益は大事でしょう。でもこれから何十年も生きていく子どもや若者の「今」も同じくらい大事です。

その点では、静岡新聞をはじめとする地方のメディアのほうに、行事中止など過剰ともみえる感染防止対策に翻弄されている、good job! と思えました。